第11回研究大会（弘前大学）の概要

中　村　信　吾（大会実行委員会委員長）

【これからの10年】

環日本海学会第11回学術研究大会が、2005年10月１日(土)および２日(日)の２日間にわたって青森県弘前市の弘前大学において開催された。今回が青森県での初開催となる。これで大会開催都道府県に青森が加わり、本州の日本海側の県で大会が開催されていない県は、残すところ山形県・兵庫県・山口県となった。

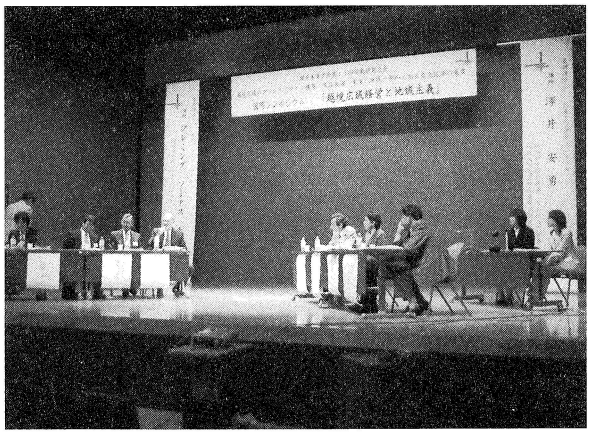
日本列島の中央から約600km、弘前は独自の津軽文化の華を、この辺境の地で長きに渡って育んできた。その距離、四季の美しさと冬の厳しさ、御岩木山の裾野に広がる平野……これらが、われわれの誇る“文化の特殊性”の苗床である。しかし、今回の大会では、この“距離”と交通の不便さが大会実行委員会の最も心配するところとなった。幸い、寝台特急日本海に揺られ、また飛行機を乗り継いでまで、会員各位が積極的に参加くださり活発な議論が行われ、その心配は杞憂に終わった。

今大会は、第10回記念大会（東洋大学）を受け、学会設立後、新たな10年の１年目ということもあり、地域と学会そのものの今後をどう考えるか、大会全体のコンセプトは“将来構想”に設定された。シンポジウム・分科会・会員総会・エクスカーションはこの統一コンセプトを基に組み立てられた。

【第1日目：地域グランドデザイン】

初日は、将来の環日本海地域のグランドデザインを議論するために、「越境広域経営と地域主義」と題して国際シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、今後、青森を含む北東アジア地域がどのように発展していくのかの道筋を示す、国際版「国土計画」に関する比較の試みである。EUでは、既にこのグランドデザインが出来あがり、これに基づいた地域開発が行われている。それには、東西交通軸・エネルギー供給網・文化協力など様々な分野の開発が、１つの青写真の下に統合されている。シンポジウムは、北東アジア地域協力グランドデザインと欧州地域協力グランドデザインとを、それぞれの専門家を講師に迎え比較検証する世界で初めての画期的なシンポジウムであった。

2005年12月、マレーシアでASEAN＋３の東アジアサミットの開催が予定されていたことも、このシンポジウムが開催されるタイミングとして適



切であったのだろう。「東アジア共同体」構想の議論が高まる中、このシンポジウムは、両グランドデザイン比較の意義の高さから、欧州委員会駐日代表部により、「2005年　日・EU市民交流年」イベントに位置づけられた。地元メディア東奥日報も、9月に『環日本海学会早分かり』の8回連載の特集を組み、シンポジウムと本学会の社会での役割を地域社会に理解してもらう契機となった。

シンポジウムの講師には、基調講演1として、『ソーシャルガバナンス』著者で、北東アジアグランドデザイン策定の中心的役割を担っている総合研究開発機構（NIRA）理事・法政大学大学院政策科学研究科客員教授の澤井安勇氏にお越しいただき、北東アジアに関する最新の研究成果をお話ししていただいた。さらに欧州からは、基調講演2として、EUの開発グランドデザイン策定委員会委員長の立場で、環北海地域グランドデザイン『NorVision―北海沿岸地域の越境広域経営の展望』を立ち上げたフレミング・ソーナス氏（デンマーク環境省、現EU地域政策ESPONユニットコーディネーター）をお迎えし、欧州全体の地域開発連携から環北海の問題まで広くお話ししていただいた。

また、この2人に加え、パネリストに日本大学教授佐渡友哲氏、昭和女子大学大学院志摩園子氏、秋田経済法科大学教授千葉康弘氏、環日本海経済研究所（ERINA）特別研究員の三橋郁雄氏、ファシリテーターに山形大学教授高橋和氏をお招きし、パネルディスカッションが行われた。三橋氏からは、輸送回廊のミッシングリンクについて、千葉氏からは、地域の視点からそのニーズをどのようにくみ上げていくか、また財源調達の問題、推進母体の問題、アクターの問題についての問題提起があった。志摩氏からは、バルト地域の地域協力の歴史的経緯と、そこから発展した現在の協力形態であるクロスボーダー・コーポレーションの問題から地域に住む者が、「地域」をどのように設定するかという問いが投げかけられた。また、佐渡友氏からは、地域協力の理論的整理が行われ、「地域協力」は、経済的・政治的に波及効果を持つ概念であることが確認された。

シンポジウムの事前理解・事後の議論を深めるための“キット”についても、新たな試みがなされた。このシンポジウムに合わせて新潟地域総合研究所の協力で『NorVision―北海沿岸地域の越境広域経営の展望』の日本語版翻訳が発行され、シンポジウム討議資料として基調講演時に参加者に配布された。さらに、このシンポジウムの議論を記録し、参加できなかった方々にも広く内容を共有してもらい、今後の研究に資するため、弘前大学出版会の力添えで『サブリージョンから読み解くEU・東アジア共同体―欧州北海地域と北東アジアの越境広域グランドデザイン比較』が議論の成果として世に問われようとしている。

これまで、環日本海学会が、北東アジアの研究のみにとどまらず、欧州地域の地域主義研究者をも擁し、その先行事例にも目配りしながら“越境協力の議論”を行ってきたことは刮目に値する。このような素地があったからこそ、両地域のグランドデザイン比較が可能となったと言えよう。それは、シンポジウムの司会を務めてくださった県立新潟女子短期大学の若月章氏がその進行の中で言及されたように、第3回研究大会（1997年、島根県・鳥取県）で検討された北東アジア・欧州の両地域の越境協力“個別プロジェクト”検証が、8年の時を経て、“グランドデザイン”に基づいたプロジェクト設計の議論にまで進展していることでもわかる。このような比較のダイナミズムを、研究大会での議論の蓄積から見ることができるのもこの学会の力の1つである。

【第2日目：これからの学会の方向性】

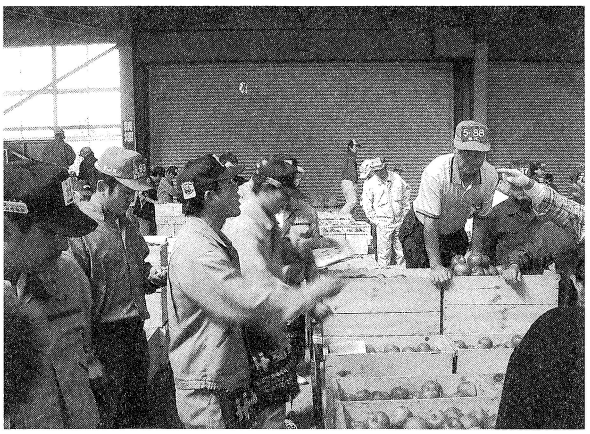
2日目には、初日シンポジウムの討論を受けて、北東アジアⅠ、北東アジアⅡ、自然・観光・地域、地域協力の4つの分科会に分かれて議論が深めら

れた（各分科会の詳細は、以下のページをご覧いただきたい）。すべての分科会報告が終了した段階で、参加者全員が一会場に集まり、全体分科会・会員総会として、座長・戸沼幸市会員のもと、本学会の名称変更の是非について討議が行われた。名称問題の議論は、「環日本海学会つうしん」に詳しく報告がなされているのでそちらに譲るが、ここでは、その討議の導入的基調講演の役割を担っていただいた国立歴史民俗博物館の青山宏夫氏のご講演「“日本海”呼称問題について」に触れておきたい。

青山氏の講演では、“日本海”の呼称を考えるとき、資料としての地図の種類と数だけの議論ではなく、その影響力を考慮するべきである点が示された。さらに、古くは、中国の地図には海洋に名前がないことの指摘に続いて、ヨーロッパ伝来の地図から海洋の名前がつきはじめている点の指摘があった。また、本州が起き上がる形になる“空間認識の変化”によって初めて日本海が閉鎖海域となり、縁海として認識され始めたことが提起された。この地域の将来、そして学会の将来のアイデンティティを考えるとき、過去に思いをいたらすことの意義を再認識させられる講演であった。

【第3日目：特殊を知る】

最終日のエクスカーションでは、２日間の将来構想の議論を、現在・未来に留めるのではなく、



さらに歴史・文化・特産へと軸足を広げ、現在・未来を過去からの連続として認識できるよう、この陸奥を体感していただくことを企画した。エクスカーションへはバスをチャーターするに十分な人数のご参加をいただくことができた。

朝、７時に集合していただき、まず、弘前中央青果㈱のりんごの競りを見学した。日本で流通するりんごの内、５個に１個はこの市場を経由する。当日の上場りんご箱数は14,830箱で主な品種は「ふじ」「サン津軽」などであった。ここでは、弘果総合研究開発㈱担当者から、りんご市場としては全国初のトレーサビリティ導入についてのレクチャーを受け、消費者に向けての取り組みが紹介された。その後、津軽氏の居城であった弘前城、津軽ねぷた村での津軽三味線演奏を見学、三内丸山遺跡でまほろばの里を堪能いただいた。

【弘前開催の意義】

「欧州グランドデザインの蓄積」と「北東アジアグランドデザインの今後」が初めて出会う歴史的な場が、青森県であったことは、国境を越えた地域協力を考える意味からも、大変貴重なことである。地域外からは、青森は、いわゆる「辺境の地」「積雪寒冷地帯」というイメージだけで語られるきらいがある。しかし、それだけでなく、青森は、国際海峡である津軽海峡を有し、六ヶ所村原発、三沢基地など国家の政策上、重要な施設を

擁している。また、青森空港からはハバロフスク・ソウルへの直行便も運行され、航空自衛隊車力分屯基地（つがる市）には、ミサイル防衛構想の一環としてXバンドレーダーの配備が検討されるなど、この環日本海地域でも戦略的重要性を担っている。

2002年に青森市は「北方都市会議」の開催をホストし、“雪の利用”や“寒冷地”などをイッシューとして提示した。国家を超えた自治体連携をイッシューから模索する１つの試みとして評価できよう。また、モンゴルと農業技術協力を進め、国家レベルと村レベルの行為体のクロス協力の貴重な先行事例である車力村（現つがる市）もある。新しき時代のモデル構築への一歩を踏み出したシンポジウムを、このような地域の交流の蓄積と、豊かな自然に恵まれた世界遺産のブナ原生林を有し、美しい日本海に面する津軽において開催できたことは意義深い。また、そこに生活の基盤を持つものとしては誇らしくも思う。21世紀の世界規模の課題は時を待たないし場所を選ぶ余裕はない。このような21世紀の課題解決に対応するために地域社会の多様性構築を目指す必要があろう。

最後に、このような意義ある大会を成功に導いてくれた講師、学会関係各位、出会いの場を提供してくれた弘前大学に第11回学術研究大会実行委員会を代表して謝意を表したい。